

文部科学省委託「外国人児童生徒等教育を担う教員の養成・研修モデルプログラム開発事業」
モデルプログラム（2017年度版）を活用した授業・研修事例
大学における養成 No.7

日本語教育演習

検証実施機関（団体）：兵庫教育大学
兵庫教育大学 大学院学校教育研究科／グローバル教育センター 岡崎渉

主たる対象者	学部生
目標	(1) 日本語指導の実践力を身につけること (2) 多文化化にともなう社会の問題を認識し、関心をもてるようになること
内容	★⑰日本語指導の理論と方法（日本語教育の方法、模擬授業、等）、他⑥⑭⑯
形態・方法	講義型、活動型、フィールド型
時間	22.5時間（1.5時間×全15回）

★本事業報告書（2017）「養成・研修内容構成」（pp.72-76）の項目

1. 現状と課題

（1）兵庫県の現状

兵庫県の公立小中学校等に在籍する日本語指導が必要な児童生徒は、1,214人（2016年、文科省）であり、県内の広域に散在している。今後も増加傾向は続くと思われることから、より多くの教員志望学生が、外国人児童生徒等教育についての最低限の知識・技能を身につける必要がある。

（2）兵庫教育大学の現状

兵庫教育大学は、国立の教員養成校として、卒業生の8~9割が卒業後、教員、または保育士になり、その多くは兵庫県内の小学校等に赴任する。兵庫県内の小学校等における多文化化の進行にともない、本学では2018年度より、従来、学部・大学院に開講されていた言語系（国語・英語）の専門科目「日本語教育」を、外国人児童生徒等教育に主眼を置いたシラバスに変更した。さらに、2019年度の改組にともない開始される新カリキュラムでは、学部・大学院（2019年度より教職大学院）ともに、外国人児童生徒等教育であることがわかる科目名に変更され、また、学部の場合は全学対象の選択必修科目となる。今後、関連する諸分野（教科教育、教育行政、心理、特別支援、異文化間教育、等）の教員および県の教育委員会、地域の国際交流協会等との連携を深め、学生により有益な学びの機会を提供していきたい。

（3）本学における教育上の課題

- ① 外国人や日本語非母語話者と接した経験が皆無の学生も多く、地域や学校現場が多文化化しつつあることへの現実感に乏しい
- ② 教員免許、教員採用試験に関係のない科目であるため、学習の動機づけが弱い
- ③ 学生のみならず、学校教員養成に携わる教員の多くにも、当該の問題が公教育における重要な課題として認識されていない

2. カリキュラム（研修実施計画）

★本事業報告書（2017）の「養成・研修内容構成」（pp.72-76）の項目

科目名	日本語教育演習			
受講者	学部 2～4 年生（言語系[国語, 英語], 学校教育系）12 名（内 10 名が, 外国人児童生徒等教育についての基礎を学ぶ科目「日本語教育」を受講済）			
目標	(1) 日本語指導の実践力を身につけること (2) 多文化化にともなう社会の問題を認識し, 関心をもてるようになること			
内容	地域日本語ボランティア教室に通いながら, 授業では並行して, 指導方法を中心に日本語教育の基礎的な知識・技能を学ぶ。最後の 2 回の授業では, 日本語初級学習者を想定した模擬授業を行う。 ★⑥社会的・歴史的背景(在留外国人と日本語教育の現状) ⑭現場での実践(地域日本語ボランティア教室での実践) ⑯日本語に関する内容(音声, 語彙, 文法) ⑰日本語指導の理論と方法(日本語教育の方法, 模擬授業, 等)			
講師	岡崎渉(兵庫教育大学)			
内容 (各 90 分)	★	形態	詳細	資料・教具等
1. ガイダンス				
2. 地域在住外国人の背景, 日本語教育の概要, やさしい日本語	⑥ ⑰	講義	・ 地域日本語ボランティア教室に多い技能実習生を中心に, 在住外国人のデータや社会的背景を説明 (20 分) ・ 「日本語教育」の対象者, 目的, 材料, 方法について概要を説明 (20 分) ・ 「やさしい日本語」について, 動画視聴を交え説明を行った後, 実際に普段の会話で使われる日本語を「やさしい日本語」に変換する練習 (50 分)	資料①, やさしい日本語ツーリズム研究会の動画, 「やさしい」日本語の練習問題
3. ボランティア教室(1)	⑭	実践		
4. 初級の指導	⑰	講義 ・ 演習	・ 日本語初級授業の動画を見て, 気づきをふり返り, 共有 (20 分) ・ いくつかの語彙や文型を取り上げ, 初級学習者にどう説明すれば意味が理解されるか考えさせた後, 講師がイラストや図表等, 言葉以外のリソースを用いてわかりやすく伝える方法を解説 (70 分)	日本語学校での初級日本語授業の動画
5. ボランティア教室(2)	⑭	実践		
6. 品詞の活用	⑯	講義	・ 動詞等の活用, 文法規則, 音声についての基礎知識を講義	講師作成の練習問題
7. ボランティア教室(3)	⑭	実践		

8. ボランティア教室の準備	⑰	演習	・図書館で各自日本語教材を調べつ、次回ボランティア教室の準備	
9. ボランティア教室(4)	⑭	実践		
10. ベトナム語入門, 指導のポイント	⑰	授業体験 ・講義	・直接法でのベトナム語入門授業（初対面時のあいさつ）を、ベトナム人留学生に依頼し、受講生を学習者役で実施（15分） ・授業のふり返り、共有により、直接法の理解を促す（15分） ・教え方についての動画を見て、指導の際のポイントや気をつけるべき点を学ぶ（60分）	アルク「6つのアドバイスで授業が変わる！『教え方』上達DVD」
11. 日本語初級指導手順	⑰	講義	・文型の導入、語彙・文型練習、会話練習（ロールプレイ、タスク等）、誤用訂正の方法を解説、練習	資料②
12. 模擬授業準備(1)	⑰	演習	・ペアで『できる日本語 初級』より指導項目を選び、15分程度の模擬授業（学習者の年齢は任意）の準備を行う	『できる日本語 初級』
13. 模擬授業準備(2)	⑰	演習	・模擬授業の準備	
14. 模擬授業(1)	⑰	演習	・模擬授業（4組）（60分） ・グループ間でコメントをさせた後、講師が総括（30分）	学習者役は大学の留学生に依頼
15. 模擬授業(2), 総括	⑰	演習	・模擬授業（2組）（30分） ・グループ間でコメントをさせた後、講師が総括（30分） ・全授業回を通して、1）「何を学べたか」、2）「将来、日本人児童生徒への教育でも役立ちそうな点はあったか」という問いによるふり返り（30分）	学習者役は大学の留学生に依頼

3. 実施者による振り返り

受講生の大半は学校教員（主に小学校）を目指す学生であり、日本語教育を体系的に学ぶ時間はない。そのため本科目では、知識よりも体験を通じた学びを重視することにした。そこで受講生には、日本語の教え方についてほとんど知識のない状態で、地域日本語ボランティア教室に通わせた。ボランティア教室に参加した後は、毎回 google form を通して、教えることを通して得た気づきや課題といったふり返りを提出させた。直近の授業では、このふり返りを踏まえた内容の講義を行った。また、ベトナム人留学生の協力を得て、直接法によるベトナム語の授業を体験させた後、初級日本語の模擬授業を実施した。

本科目受講による効果を、受講生による振り返りから判断すると、地域在住外国人に対する理解、ステレオタイプの軽減につながったという点、日本語を教える上での難しさ、教える際に必要となる工夫についての理解が促されたといった点が挙げられる。これらは将来、外国人児童生徒とその保護者への理解や接し方、ならびに日本語指導において役立つものである。また、教員になってから日本語指導の機会がなかったとしても、通常の教科指導において、内容をわかりやすく伝える上で役立つという声も聞かれた。

今回は次善の策として大人対象の地域日本語ボランティア教室に参加してもらったが、やはり大半の学生が学校教員を目指している以上、教育委員会や近隣の学校を通して、児童生徒と関わる機会を確保する必要がある。また、外国人児童生徒等教育で求められる資質・能力には、教育における他の分野や、教員一般に求められるそれとも重なる部分が少なくない。学内外の専門家や関係者との連携をうまく図るための行動力も、教員養成において外国人児童生徒等教育を担当する講師には求められよう。

4. 資料

(1) 使用・参照した資料一覧

- ・やさしい日本語ツーリズム研究会 <<https://yasashii-nihongo-tourism.jp/>>
- ・アルク <<https://www.alc.co.jp/jpn/article/shinmai/02.html>>
- ・荒川洋平（2016）『日本語教育のスタートライン 本気で日本語教師を目指す人のための入門書』スリーエーネットワーク
- ・できる日本語教材開発プロジェクト（2011）『できる日本語 初級』アルク
- ・講師が作成した資料（(2) の配布資料）

(2) 配布資料 （シンポジウムでは配布しません。『事例集』に掲載します。）